

平成28年度「きのさき見て歩き」第1回開催しました

6月3日（金）雲ひとつない青空のもと、「きのさき見て歩き」第1回「城崎文学碑めぐり」を開催し、大谿川上流では志賀直哉の足跡をたどって「城の崎にて」でイモリを見つけた場所を探索しあいました。



島崎藤村は、北但大震災後間もない昭和2年に城崎を訪れました。城崎温泉駅前の藤村の文学碑の前で、トライやるの中学生が、藤村の「山陰土産」の中から、震災から復興する町の様子を描いた場面を朗読した。



城崎文芸館前の志賀直哉文学碑。講師坂田文一郎氏から、文学碑建設のいきさつや、志賀直哉が訪れた当時の街並みを城崎の人々が守ってきた思いなどを聞いた。



震災翌年の昭和元年には新しい橋が架けられた（愛宕橋）。城崎の復興の意気込みが分かる。昨年兵庫県の登録有形文化財に指定された。



有島武郎は、大正12年4月、鳥取講演ののち、城崎を訪れた。宿の女中に乞われて「濱坂の遠き砂丘の中にして侘しき我れを見出でつるかな」の歌を書き与える。この翌年に自死。



志賀直哉ゆかりの桑の木周辺。「城の崎にて」で直哉がイモリをみつけた場所をそれぞれが特定しあう。イモリも登場し、石を投げた場面も再現。

